海賊からの便り－41

2016/11/01

推薦図書『自由と規律』
～読書週間を迎えて～

宮下佳廣

以前に紹介した『自由と規律』＜池田潔著　岩波新書（1949）、敗戦後の混乱期の日本人に英国流の民主主義精神を説いた随想＞からエピソードを抜粋し、英国と日本の共通点を考えてみたいと思います。

エピソード１：蝶の採集に出かけたパブリック・スクールの教師と生徒（伯爵子息）が出先で第一次大戦勃発のニュースを聞き、その足で従軍志願する。二人が途中の郵便局でそれぞれの家に事情を説明する手紙を書いている際、教師が生徒をそっとみると肩がわずかに震えていた。その後一度だけ前線の塹壕で出会ったとき、生徒の顔にはすでに少年の面影はなかった。結局生徒は帰らず、教師は片足を失って帰還。生徒の戦死を聞いた教師は「これで英国では自転車が二台無駄になった」と言う。

古き良き英国の貴族階級は平素優遇されていますが、国家の危機に際しては先頭に立って死地に赴くのを当然としていました。この精神を「ノブレス・オブリージュ(仏語)」（高貴なる者に伴う義務）と言います。『武士道』(1899)を著わした新渡戸稲造は、武士がその職業において、また日常生活にお いて守るべきものが武士道であり、武人階級の身分に伴う義務「ノブレス・オブリージ ュ」であると論じています。

エピソード２：イギリスの芝生は美しい。見学に来たアメリカの富豪が芝上でローラーを押している園丁にお金を握らせて芝の手入れの秘訣を聞いた。「水をやりなさい、ローラーをかけなさい」そう答えた相手に富豪はさらにお金を渡す。園丁は同じことを答える。「水をやりなさい、ローラーをかけなさい」。富豪はさすがに怒りながらも、さらにお金を握らせる。園丁は言う「それを毎日繰り返して500年経つとこうなるんで」。園丁はノーベル物理学賞を受けた世界的な学者であり校長であった。

原理原則を頑なまでにまもるイギリス人の真骨頂が見られる話であり、お金で解決しようとするアメリカ人への痛烈な皮肉が込められています。

英国は世界の中で園芸が最も盛んな国と言われていますが、幕末に日本を訪れた英国の植物学者ロバート・フォーチュンは、日本の庭園管理や園芸技術の高さは英国に勝るとも劣らないと本国に伝えています。

本書は、今日まで100刷りを超えるロングセラーとなっています。とかく権利だけを主張する、或は何でもありの現代の風潮の中で、人として果たすべき義務や、信念を貫く生き方の大切さに共感する多くの人達により時代を超えて読み継がれている証左でありましょう。

秋の夜長、千代田の皆さんにも是非一読をお薦めしたい一冊です。

（今年70 回目を迎える読書週間は10/27~11/9です。）

感想・ご意見など ym2041@axel.ocn.ne.jp 迄、ご連絡いただけたら幸いです。

海賊からの便り－42

2016/12/01

「ななめの関係」の大切さ
～筋交いの役割～

宮下佳廣

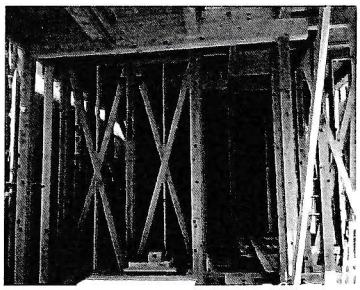
平成20年度国民生活白書によれば、現代人の2人に1人が何らかのストレスや悩みを抱えており、その原因に「仕事や勉強の悩み」「職場や学校での人間関係」があるとしています。今、これらの解決策として「ななめの関係」が注目されています。

現代の子育てや教育の現場、職場などでは、親と子、先生と生徒、上司と部下などの「上下の人間関係」や、兄弟や友人、同僚同士などの「横の人間関係」が基本となります。何かトラブルや悩み事があると、まず「上下」や「横」の関係の人に相談しがちですが、これらの人間関係は深すぎるため、逆効果になることもあるようです。「上下でも横でもない人間関係」すなわち「ななめの関係」とは、家族や友人、職場の上司ではないけれど親身になってくれる人を意味します。「ななめの関係」では、「上下」や「横」の関係とは違った視点からのアドバイスをもらえたり、聞いてもらうだけで気が晴れたり、何気ない会話から気持ちが楽になることがあります。

近年、文部科学省は全国の学校に対し、子どもを守り育てるために地域の人材を活用して「ななめの関係をつくろう！」と呼びかけています。思春期の子どもは、友人関係「横の関係」などで傷つき悩みやすく、ひとりで思い詰めることも少なくありません。そんなとき、親や教師といった「縦の関係」にある人には、相談しづらいものです。特に親は距離が近すぎて、かえって話しづらいこともあります。社会全体で子どもを育て守るためには、親でも教師でもない適度な距離感のある第三者と子どもとの新しい関係＝「ななめの関係」をつくることが大切な時代となっていると思います。

精神医学者の笠原嘉は、組織や集団では、フォーマルな「上下関係」に対して、インフォーマルな「ななめの関係」が存在することによって、緊張感や感情的な衝突への適度なクッション機能が生まれると述べています。このことは、組織や集団というソフト面だけではなく、建築物というハード面でも同様です。

日本古来の木造建築に見られる軸組み工法には、必ず筋交い(すじかい)が用いられており、地震や強風などによる横揺れを小さくする働きがあります。これを組織や集団におきかえてみると、一番大切な柱＝「縦の関係」や梁＝「横の関係」に、ななめに支える筋交い＝「ななめの関係」が加わることにより、人間関係が豊かになり、リスクに強い組織や集団ができることになります。



木造軸組み工法に見られる筋交い

千代田の社内では、営業所の枠を超えて先輩が後輩の相談にのっている例があると聞いています。社外取締役もある意味では「ななめの関係」の役割を担っていると考えられます。今後も千代田という建物にしっかりした筋交いを張り巡らしていきましょう。

感想・ご意見など ym2041@axel.ocn.ne.jp 迄、ご連絡いただけたら幸いです。

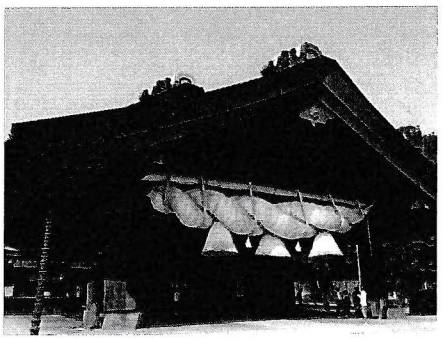
海賊からの便り－43

2017/01/01

未来の蕾がいっぱい

宮下佳廣

鎮守の森活動を進めている島根県飯南町のまちの自慢の一つは、車で1時間程にある出雲大社の大しめ縄を製作していることです。このしめ縄の大きさは国内最大級で、2013年に行われた60年ぶりの遷宮時には、わらの栽培から1年半、約40人近い人たちが関わり新調されました。しめ縄の由来は蛇の交尾の姿であり、その営みのエネルギーが豊饒のシンボルとなり、脱皮することに生命の再生と循環を祈っていると役場の方から教えられました。



出雲大社神楽殿の大しめ縄

技術革新が進む今日、注目されている新しいテクノロジーに「バイオミミクリー Bio-mimicry（生物模倣）」があります。これは、自然や生物の持つさまざまな機能から、そのデザインやプロセスを模倣して、人間社会に役立たせようという科学技術です。例えば、新幹線のぞみのデザインは、500系はカワセミを、700系はカモノハシを参考にしています。又、痛くない注射針の開発には、知らないうちに血を吸う蚊の口吻をモデルにしており、泥が付かないタイルの新製品は、カタツムリの殻の特殊な構造の縞模様を復元して生まれています。現在、千代田の独自商品づくりとして産学連携で取り組んでいる製鉄現場での落鉱処理自動化設備の発想のヒントは、ロボット掃除機「ルンバ」と聞いていますが、このロボットも条件反射で動く昆虫がモデルとなっています。

今から20万年前、私たち人類の祖先はアフリカで誕生しましたが、生命の誕生は40億年前後と言われ、この地球の歴史の中で生き物たちは「生き残っていくためにはどうすれば良いのか」を探し求め、そのために自らを進化させてきました。人類の2万倍以上の年数を生き続けてきた生き物たちに学び、その無言の叡智に敬意を払うことが大切です。

今年も新たな事業や商品開発等、皆さんが今までに取り組んでこられたテーマが芽吹くことを期待しています。

新年を迎えるにあたり、陶芸家河井寛次郎の詩「手考足思」の一節を紹介します。

過去が咲いている今、未来の蕾がいっぱいの今

感想・ご意見など ym2041@axel.ocn.ne.jp 迄、ご連絡いただけたら幸いです。

海賊からの便り－44　　2017/02/01

Wonderful Experience
～組織風土とファミリーシップ～

宮下佳廣

2013年の本屋大賞に選ばれた「海賊と呼ばれた男」が映画作品（岡田准一主演）となり、昨年12月から上映されています。現役時代の印象に残るエピソードから組織風土とファミリーシップについて考えてみたいと思います。

今から40年前、紛争が続く中東のベイルート（レバノンの首都）で戦火が一段と激しくなり、出光はやむをえずオフィスを閉鎖することにしました。残務整理を全て終えた現地スタッフが、誰に言われることもなく、日本の出光本社へ最後のテレックス（当時はメールのない時代）を打ちました。

I will never forget in my life, kindness and ***familyship*** *gives by Idemitsu people towards me and* ***wonderful experience.*** *I got from this company・・・・・。*

このテレックスは、社員の自主性を重んじながら家族の一員と考える出光の組織風土が、仕事の充実感から感謝の気持ちにつながること、ひいては一人ひとりの人生に大きな影響を与えたことを物語っています。

冬の代表的なスポーツに駅伝競技があります。最近の大学駅伝で注目されている青山学院の監督は、営業マンとなってからスカウトされ、今日の強豪チームを作り上げました。監督の仕事は、雰囲気、風土など“目に見えない”ところを感じ取ることであり、組織（チーム）の風土づくりと個人の成長をどう組み合わせるかがリーダーの役割であると述べています。さらに夫婦で学生寮に住み込み、夫人は食事の世話や健康面の相談相手として“選手の母”と言われるようなファミリーシップも強いチームづくりの大きな要因です。

企業活動も、駅伝競技のように伝統というタスキを次のランナーへ引き継ぐことに他なりません。決められた区間を全力で走り抜き、タスキを次の走者に渡す選手と同様、千代田の皆さんにはそれぞれの持ち場で、自分の生涯で悔いのない知恵と汗を出し切り、***wonderful experience*** を実感してほしいと思います。この実現のためには出光や青山学院の例にみられる組織風土とファミリーシップが大きな影響を及ぼすものと思われます。

ここ数年間の千代田の皆さんとの関わりの中で、日本のモノづくりに貢献する高い志と社員教育に熱心な社風を感じています。今後も千代田ファミリーが一体となってこの理想を貫いていくことにより、10年後、20年後の未来が明るいものとなっていくことでしょう。

感想・ご意見など ym2041@axel.ocn.ne.jp 迄、ご連絡いただけたら幸いです。

海賊からの便り－45

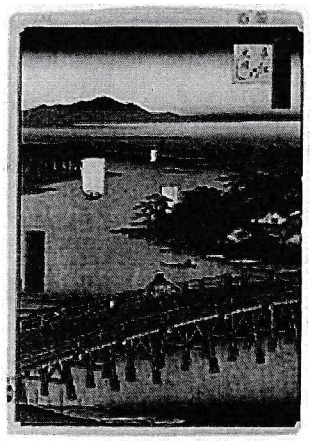
2017/03/01

木橋（もくきょう）に学ぶ
～適材適所と美点凝視～

宮下佳廣

鎮守の森の活動では、東京湾に注ぐ荒川流域（秩父～荒川区）で、地方と都市の交流を進めています。今回はこの荒川に架かる木の橋に関する話題です。

荒川の下流部は隅田川と呼ばれ、この川に架かっていた木橋の千住大橋は、最初の架橋から明治18年の台風による洪水まで、流出が一度も無く江戸300年を生き抜いた名橋といわれてきました。江戸時代、この千住大橋を建造する材木は秩父から切りだされ、筏を組んで荒川を下ったといわれており、当時の交流が偲ばれます。「木の教え」の著者塩野米松によると、かって日本の大きな川に架かる橋は、建物に匹敵する難しい木造建築でした。確かに橋は風雨にされる厳しい環境に置かれており、人々の生活や生命に関わる重要な役割を担っています。丈夫で長持ちすることは当然の事として、景観としての美しさも求められています。



江戸百景「千住の大はし」歌川広重

山口県岩国市にある錦帯橋は日本三名橋（日本橋、眼鏡橋）のひとつに数えられ、その中では唯一木造の橋です。釘を1本も使わずに組木の技術によって造られていることから、橋梁技術においても世界的に有名です。先人たちの知恵が受け継がれたその技術は、数種類の木を組み合わせてゆくもので、江戸時代の創建以来幾度も架け替えられています。橋を支える桁の中でも最も強度が求められる根元と中央にはケヤキを、水面に立つ橋杭は水に強いヒバ、又木組みを支える部材の雨覆いはクリ、橋の敷板や欄干には美しい木目のヒノキをと、それぞれの特性を活かして作られました。このような伝統的な日本家屋や寺社、橋などの建築現場から、適切で理にかなった木材の使い分け、すなわち「適材適所」という言葉が生まれています。

千葉大学で、園芸学研究科修了後広井教授のゼミで1年間学びました。ゼミでは毎週課題に対するレポートの発表があり、各学生の着眼点や取り組み方は様々でした。これに対する広井教授のコメントは、それぞれの発表の良い所を見出し、その後の各人の研究意欲が高まるような助言でした。私自身は、欠点指摘型の古い教育を受けてきただけに大変新鮮に映り、美点凝視（長所に着目し、勇気づける）が実践されていることが印象に残っております。戦後の日本は、科学万能、効率優先、画一化、デジタル化を追求してきました。さらに、昨今は人間の知能を上回るAI（人口知能）時代も間近といわれています。職場や家庭、友人との人間関係において、本来の「適材適所」の意味に立ち返り、一人ひとりの能力、個性、癖を見極め、それらを活かしていく人間関係の秘訣を木橋から学びたいものです。

感想・ご意見など ym2041@axel.ocn.ne.jp 迄、ご連絡いただけたら幸いです。